

# 「春日権現験記絵」と蓮華王院「六道絵」

神戸大学  
田中水萌

かつて後白河院によって蓮華王院の宝蔵に「六道絵」（以下、宝蔵「六道絵」）が収蔵された。院の死後、宝蔵絵巻は散逸し宝蔵「六道絵」もまた行方がわからなくなるが、日記類などから後堀河院の命によって宝蔵より持ち出されて以来、西園寺家に所有されていたとされる。その西園寺家に所縁のある絵巻に「春日権現験記絵」（以下「験記」）がある。この絵巻は奥書から徳治二年（1307）西園寺公衡によって発願され、延慶二年（1309）春日大社へ奉納された。絵は絵所預の高階隆兼が描いた。この制作期間は宝蔵「六道絵」が西園寺家に所蔵されたと考えられる期間と重なる。また「験記」の制作に携わった高階隆兼は、先行研究によってその作画における古画からの図像の「引用」が指摘され、特に風俗表現においては「年中行事絵巻」や「病草紙」（諸家分蔵）といった蓮華王院宝蔵絵巻からの引用もみられる。このことから、本発表においては現存の「地獄草紙」（東京国立博物館、奈良国立博物館）、「病草紙」（諸家分蔵）、「餓鬼草紙」（東京国立博物館、京都国立博物館）を宝蔵「六道絵」に比定し、鎌倉時代に制作された六道を表す作例、承久本「北野天神縁起」や「六道絵」（聖衆来迎寺）、「十界図」（禅林寺）などと合わせて「験記」の図像と比較することによって、「験記」の図像に宝蔵「六道絵」の図像の継承があることを地獄の描写を出発点に指摘したい。

「験記」の地獄の描写は巻六第一段、巻九第三段、巻十一第一段の三段にみられる。三段とも地獄を表す図像として閻魔王庁を用いており、その背景には鎌倉時代以降『地藏菩薩発心因縁十王経』の流行により閻魔王をはじめとする十王図が多く制作され、そこに地獄あるいは六道を複合させた作品が頻繁に制作されたことがある。三段のうち巻六第一段のみ地獄の様相が詳細に表され、ここでは詞書にはない地獄の描写である十の責め苦が描かれている。先行研究からも、それらは『往生要集』の八熱地獄に依拠すると考えられる。そこには先に述べた六道を表す作例の地獄の描写に類似するモチーフもみられ、このことから「験記」の地獄には十四世紀すでにある程度定型化された、『往生要集』をふまえた地獄表現がなされていることがわかる。しかし一方で、「亡者を釜で煎る」といった宝蔵「六道絵」にのみみられる表現もある。また、先行研究でも指摘される病の表現がみられる巻六第三段や巻八第二段などにおける、病臥する人物図像は明らかに「病草紙」の、そして巻九第一段、巻十七第三段における排泄の図像は「餓鬼草紙」の図像の継承であるといえる。さらに巻二、巻十九の合戦の図像や巻十四の火事の図像にも注目することで「験記」における宝蔵「六道絵」の引用の様相を明らかにし、このことから逆に西園寺家に伝来した宝蔵「六道絵」が現存する「地獄草紙」他であることも示したい。